青果物流通の変化にともなうカザフスタン地域農業の変容

渡邊　三津子

ソ連崩壊後にながらく低迷したカザフスタン農業は、2000 年代に入ってからは穀物の輸出に牽引されて回復してきた。一方で、国内の食糧需要に対して穀物以外の農作物の自給率は決して高いとは言えず、とりわけ青果物に関しては、2000 年代後半ごろから輸入が増加する傾向にある。概して、カザフスタンの農業は、北部のカザフステップを中心とする穀物生産地帯、中部の乾燥地域を中心とする畜産地帯、そして南部の灌漑農業地帯の三地域に大別される。カザフスタン農業の回復を牽引した穀物は主に北部地域で生産され、野菜・果物などは南部を中心として栽培されてきた。この意味で、青果物輸入増加の影響を最も受けやすいのは南部地域の農業生産者や市場であるといえよう。そこで、本研究では、カザフスタン南部を対象として、青果物輸入の増加が青果物市場や地域の農業に対しどのような影響を与えたか、あるいは与えつつあるのか、という点に焦点を当てる。

今回の報告では、FAO の統計データから対カザフスタン輸入青果物の主な生産国である中国とウズベキスタンにそれぞれ隣接するアルマトゥ州および南カザフスタン州の事例の比較を通して、市場や農業の変容の実態とその地域性について検討した。なお、本報告は、2013 年 8 月～ 9 月、2014 年 8 月～ 9 月に、アルマトゥ州のアルマトゥ市および近郊農村（カスケレン、カプチャガイ）、同州パンフィロフ地区ジャルケント、南カザフスタン州のシムケントおよび近郊農村（アサル、サイラン、トゥルキスタン）を訪問し、市場の卸売・小売業者と農業生産者に対して実施した聞き取り調査に基づいている。

はじめに、当該地域の人びとにとって身近な市場（バザール）に出回る輸入青果物の季節性について述べる。アルマトゥ市の中央卸売市場アルトゥン・オルダ・バザールおよびジャルケントのコーク・バザールでの聞き取りによれば、5 月～ 10 月にかけては安価な地場産青果物が多く出回るが、2 月から春先までは輸入物が中心となる。一方で、シムケントの中央卸売市場カールマルクス・バザールや、アラシュ・バザールでは、厳冬期には地場物の供給が少なくなる傾向はあるものの、アルトゥン・オルダ・バザールほど顕著ではないという。以上から、地場物が端境期となる冬季には輸入物が相対的に多くなるなど、市場に出回る輸

入青果物の量は季節によって変動するが、最盛期と端境期の変動幅はアルマトゥ州と南カザフスタン州において地域差があることが指摘できよう。

次に、輸入青果物の輸入元（生産国）についても、アルマトゥ州と南カザフスタン州で差異が認められた。アルマトゥ市アルトゥン・オルダ・バザールでの聞き取りによれば、以前はタシケント（ウズベキスタン）から多く仕入れていたが、最近は中国からの仕入れが増加しているとのことであった。産地のシフトが起こっている理由の一つとして、ウズベキスタンからよりも、中国から仕入れた方が早く商品が届くと指摘する卸売業者もいる。一方、シムケントに関しては、やはりウズベキスタンからの輸入が卓越する傾向がある。シムケントにおける中国産青果物に対する印象は、地場産やウズベキスタン産青果物に比して割高というものであり、アルマトゥのような輸入元のシフトは見受けられない。

市場においては、輸入青果物の増加が実感として受け止められているようである。このようななか、施設栽培に踏み切った農業生産者もみられる。実際に施設栽培の導入に踏み切った農業生産者から共通して聞かれたのは、地場産の端境期の需要を見込んでの導入、という声である。個人経営が多い南部カザフスタンでの「ビジネスとしての農業」を強く意識した言説である。

施設で栽培された青果物の主な出荷先についても大きな違いがみられる。アルマトゥ、ジャルケントとそれぞれの近郊農村は、当該地域の卸売市場が主な出荷先であるのに対し、シムケントとその近郊農村の場合には、シムケントの卸売市場だけでなく、アルマトゥやカザフスタンの他の地域へも出荷されている。つまり、アルマトゥ州の施設栽培がおもに近郊農業としての性格を有するのにたいし、南カザフスタン州の施設栽培は遠郊農業としての性格も兼ね備えていることがうかがえる。前者には、アルマトゥ州がアルマトゥ市というカザフスタン有数の消費地を抱えていることを、後者に対しては、カザフスタンで最も南に位置するその温暖な気候特性を、それぞれ重要な因子としてあげることができよう。

以上のように、近年のカザフスタンにおける冬季の青果物の流通状況や、農業生産者たちのビジネス戦略としての施設栽培の導入状況については、地域による差異が見受けられる。今後は、ウズベキスタンや中国の輸入青果物の買い付け先の市場など、より広域的な目で流通ネットワークを捉えること、農業生産者へのインタビューを蓄積し、かれらの生産・流通戦略に関する考察を深めることなどが課題である。また、パネルディスカッションで話題になったように、現在みられるような農業の地域的差異を生じさせた背景として、ソ連崩壊後の流通ネットワークがどのよう再生してきたか、という点も重要な視点である。今後の課題としたい。

（奈良女子大学共生科学研究センター研究支援推進員）